



わたしが考える「義務教育学校の役割」～少しかたい話です～

満6歳を迎えた翌年の4月から小学校に入学し、15歳を迎えた3月に中学校を卒業するまで、子どもたちは憲法や教育基本法などに定められた、義務教育のもと「学校」に通います。（この義務は保護者の方の義務で、子どもたちにとっては権利）では、この9年間で何を学ぶのでしょうか？子どもたちの毎日の学習や学校行事、体験学習は、分かりやすいものの1つですが、もう少し大きくくり、子どもたちが大人となった頃を見据えて考えてみます。わたしは、大きく3つあると考えます。

自立：『自己実現できる力』を養う

子どもたちの可能性は無限大、自己実現できるというのは、人生の中でとても重要なことになってきます。しかし、それなりの力が育っていなければ自己実現できる可能性は低くなります。「自分が目指すものに必要な知識や技能」だけではなく、「基礎的な学力」が備わっていなければ進みたくても、進めないことがあります。厳しい書き方かもしれませんが、「なりたい」「したい」だけでは実現は難しいということです。義務教育9年間は、なりたい自分になるための基礎的な力を蓄える時期だといっても言い過ぎではありません。



共生：『他者理解力』『コミュニケーション力』を養う

学校でも、社会に出てからでも他者との関わりを「0」にすることはできません。いくら時代が変わっても、その頻度に差はあるかもしれませんが、人との関わりなしに社会生活を送ることは難しいものです。学校では、学習や生活の中で人と関わることで、社会性が育つように取り組んでいます。

貢献：『粘り強く取り組む力』『誰かの力になろうとする意欲』を養う

自分の（目標）に向かって、「あきらめずにチャレンジ」していく力は、わたしたち大人にとっても「大切な姿勢」だと思っています。この力は、そう簡単には身に付きません。ですから、小学校の段階から発達段階に合わせて、目標やめあてを立てて取り組ませるようにするのです。「成就感や自己肯定感」を高め、自信を付ける段階なのです。

そして、高学年ではもう一つ上の段階である、「誰かの力に」という思いを育てる必要があると思います。それは、低学年や下級生を支えたり、学校の仕事に取り組んだり様々ですが、人のためになっている、つまり「自己有用感」を育てることで自信を付けるのです。

このような3つの側面がバランスよく育つことで、義務教育の後の高等、専門教育の幅が広がっていくのだと考えます。わたしもそうでしたが、子どものテストや通信簿の結果がよいと嬉しいものでしたし、逆は不安になったものです。その時々結果を見て、評価することも大切ですが、少し長いスパンで子どもたちを見て、支援することも大切です。これらのことを意識しながら、3つの力を育てていきます。

～校長室の窓から～

梅雨入りして一週間。学校周りの田んぼにも、水が入り始め田植えの時期も近づきました。時には、カエルの大合唱も聞こえてきます。

6、7日には、県内各地で高校生スポーツの祭典「高総体」が開かれていました。今は、生徒の体調管理と熱中症対策のため、開会式は屋内で行われます。また、屋内、屋外に関わらず、水分補給などの「熱中症対策」については、どの競技でも、第一に考えられることになっていました。

WBGT 指数が高くなり始める時期です。わたしたちもしっかりと対策を取り、安全安心な学校生活の確保に気を付けていきます。